

北海道沙流川流域におけるアイヌによる地形の民俗分類に関する予察的研究

伊 勢 寛*

I はじめに

本邦におけるアイヌ民族に関する研究は、従来、民族学・人類学の諸分野を中心に進められ、明治期以降、多くの研究者によって伝承や生活様式に関する研究が行われてきた。すなわち、金田一（1936）によるアイヌの口承文芸の研究をはじめ、儀礼に関する詳細な記述を行った久保寺（1956, 2001）の研究や、アイヌの古老からの聞き書きをまとめた吉田（1956）の研究など、比較的多くの蓄積がある。しかしながら、従来の研究は記載的なものが多く、地域差や研究者による解釈の違いから様々な見解が出されてきた。同様に、アイヌの環境観に関する従来の研究も、アイヌの生物資源の利用法を明らかにした渡辺（1952）の研究や、アイヌの生活が山の資源に大きく依存していることに言及した犬飼（1968）の研究など、動植物を対象とした記載的な研究が多数を占めている。

一方、地理学の分野では、コタンやチャシの分布に関する小林（1975, 1980）の研究をはじめ、史料を用いてアイヌの移動形態や集落の空間的流動性を明らかにした遠藤（1990, 1997）の研究などが見られるものの、研究は緒についたばかりの段階にある。小木ほか（1999）は、『北海道蝦夷語地名解』（永田方正, 1891）を用いて自然環境を表現しているアイヌ語地名を抽出し、それらを自然地理学的に分類し、考察を試みている。

全体的に見て、これまでのアイヌ研究は、民族学・人類学や言語学的な視点からの研究が多い反面、他分

野の視点からの研究は少なく、特にアイヌの環境観や環境認知に関する地理学的研究は、極めて蓄積が乏しい領域であると言える。

人類は、いかなる集団であっても、自己をとりまく森羅万象、すなわち環境を、「文化」という名のフィルターを通して読み取り、そこから得られた環境像を基に伝統的生活様式を組み立ててきた。伝統的生活様式を基礎とする社会においては、当該地域の住民が身近な地形や天候などの自然現象や動植物に対して独自の感情移入を行い、それらを選択的に利用することがごく一般的に見られる。そこには環境の読み取りにおける地域的な特性が表出されているため、その背後に見え隠れする住民の環境観を検出する際に重要な手掛かりとなる。

この「環境」および「生活様式」は、地理学において重要なキーワードでありながら、これらの概念は近代科学の一般的傾向に従って、前者については自然科学的分析が繰り返され、後者に関しては、やや皮相的に認識された「景観」の分析がひたすら客観的に追究されるにとどまっていた。その結果、両者の間にある有機的な関係が必ずしも十分に把握できず、地理学における環境理論の進化にも限界があった（斎藤, 1989）。

しかしながら、1960年代における現象学の発展に触発され、主観を導入した「人文主義的地理学」による新たな方法論が登場した。当該地域の住民によって読み取られた環境、すなわち住民の主観が介在する「知覚環境」の対象化もその一つである。奄美諸島における礁地形の「民俗分類」¹⁾から、住民の環境観の復元

[キーワード] 1 アイヌ 2 民俗分類 3 環境観 4 地形 5 人文主義的地理学

* 立正大学大学院地球環境科学研究科地理空間システム学専攻博士前期課程

を行った堀（1979, 1982）の研究や、三宅島の住民を対象に、地形の民俗分類から環境認知の体系を明らかにした浅野（1984）の研究などは、住民の環境観や「民族科学」²⁾の研究における地理学的アプローチの可能性と必要性を明らかにしたものであると言える。

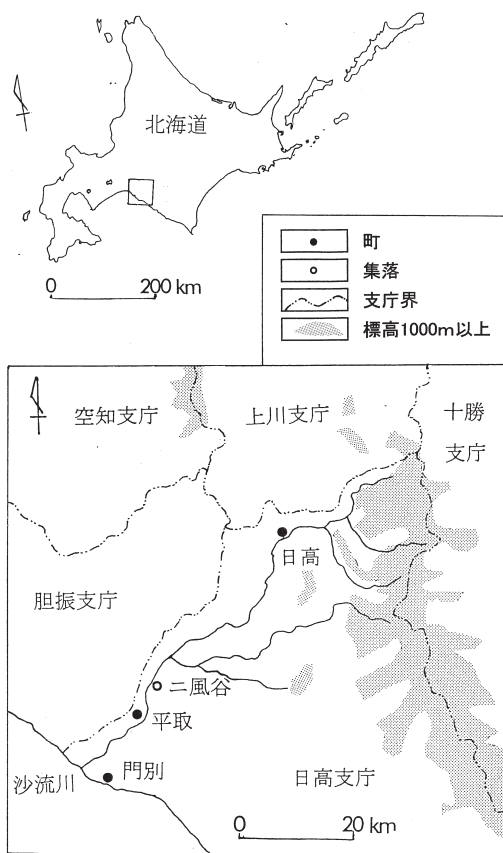
そもそも民俗分類は、民族学・人類学の分野で1960年代に確立された「認識人類学」³⁾において、土着の民族が西洋近代科学とは異なる認識の体系をもつことを明らかにするために用いられた手法である。ものを認識する際、人間は認識論に基づいて言語によって思考し、その認識の過程でものを様々なカテゴリーに分類していく。この分類の体系は言語によって表出されるため、民俗分類などの言語学的手法が、ある民族の認識の体系を明らかにする際に大きな手掛かりとなる。これを受けて山田（1986）は『分類アイヌ語辞典—植物篇』（知里真志保, 1953）を用いて植物に関するアイヌ語の語彙を抽出し、植物の民俗分類体系を明らかにしている。同様に山田（1994）は、認識人類学の新たな方法論として、言語が用いられる日常的・神話的・民族誌的背景などの象徴的用法の分析から、アイヌの宇宙観・植物分類・動物分類にアプローチを試みている。煎本（1988）は、狩猟の象徴的意味や行動戦略について民族生態学的な分析を行い、それらがアイヌの環境観と密接に結びついていることを明らかにしている。

しかしながら、これらの新しい視点からの研究においても、アイヌの環境観に関する研究の対象は、依然動植物が中心である。知里（1951, 1956）は、地名研究の際に地形に関する語彙を取り上げているが⁴⁾、地形を対象とした体系的な研究はほとんど見られず、地理学的視点からの研究が切望される。

従って本稿では、北海道沙流川流域における先住民、すなわちアイヌ民族の伝統的環境認知の一側面として、地形の民俗分類を明らかにするとともに、その研究の意義を示すことを目的としている。

II 研究方法

アイヌ民族はかつて、狩猟・漁労・採集を基盤とした生活を営んでいたが、そのような伝統的生活様式は、同化政策によって農耕が強制されたことにより、明治中期にはすでに崩壊している⁵⁾。当然のことながら、現代のアイヌ文化継承者が語るアイヌの伝統的生活様式は、どうしても間接的な体験談にならざるを得ない。しかも、現在ではアイヌ文化継承者自体の数が非常に少なくなり、アイヌ語も日常的にはほとんど話されることがないため、実地調査に基づく研究は困難なものとなっている。



第1図 研究対象地域

第1表 山に関する地形の民俗分類

番号	辞典のアイヌ語語彙	語彙素分析	辞典のアイヌ語語彙の和訳	備考
1	nupuri		山	地形としての山
2	kim		山(場所としての)・山の方	生業の場としての山
3	metot		奥山	nupuri よりもさらに遠くの山
4	iwor		①深山・奥山 ②狩場	狩りの際の自分の持ち場
5	nupuri-kitay	nupuri 山・kitay てっぺん	山頂・てっぺん・頂上	
6	nupuri-ous/-ousi (ke)	nupuri 山・ous 根元	ふもと	急勾配な山麓
7	nupuri-kes	nupuri 山・kes 末端	①山のふもと・山裾 ②乱暴者	特に平野に近い部分
8	nupuri-sut/-sutu (hu)	nupuri 山・sut 麓	山麓・山のふもと	
9	sir-sut/sutu (hu)	sir 山・sut 麓	山麓	
10	insur		山の麓	
11	uhuy-nupuri	uhuy 燃える・nupuri 山	火山	
12	pon-nupuri	pon 小さい・nupuri 山	小山・丘	丘と呼べそうなくらい小さい山
13	tapkop		小さい山(丘)・丸い山・あたりから見て目立つ山	
14	iwa		岩・岡	岩山のこと
15	ekay-cis	e 頭・kay 折れている・cis 岩(C)	(高い) 岩山	
16	situ	si 大きな・tu 峰(C)	尾根・峰・つね(峰)	尾根のこと
17	situ-o-kes	situ 尾根・o 尻・kes 末端(C)	峰尻	尾根の末端部
18	situ-mekkaske*	situ 尾根・mekkaske 峰(C)	山の峰	鋭く尖った尾根
19	sikuma	si 大きな・kuma 連山(C)	峰	遠くからでも目立つ大きな峰
20	sikuma-situ	sikuma 峰・situ 尾根(C)	分水嶺	分水嶺となる高い山脈
21	santu	san 出崎・tu 峰(C)	下がる峰・山の出崎	尾根の引込んだ部分

出典：『萱野茂のアイヌ語辞典』および同増補版より作成 *は辞典の見出し語にない語彙 (C)は知里による語彙素分析を参照したもの

その一方で、これまでの研究で得られた多くの資料が存在することや、近年では萱野(1996, 2002)らの手によってアイヌ語辞典が出版されていることもあり⁶⁾、既存の資料の新たな視点からの分析が可能となっている。

そこで本稿では、『萱野茂のアイヌ語辞典』および同『増補版』(萱野 茂, 1996, 2002)⁷⁾を用い、本辞典に記載されている見出し語の中から地形に関する語彙を抽出して分類を試みた。解釈の難しい点は辞典の著者である萱野氏に直接インタビューを行った。本辞典を用いた理由としては、①本辞典は二風谷を中心とした沙流川流域のアイヌ語を収録しており、地域の特定ができる。②著者自身がアイヌ語のネイティブスピーカーであり、著者が実際に話していた言葉が記載されているため、アイヌ語が用いられていた頃のアイヌの環境観を復元するのに適している、と考えたからである⁸⁾。

本辞典から抽出した語彙は、民俗分類の方法に基づき、可能な限り語彙素に分解して分析を試みた。語彙素分析にあたっては、本辞典以外に、『アイヌ語地形語彙』(知里, 1951)・『地名アイヌ語小辞典』(知里, 1956)を参照した。

また、本稿で研究対象地域を沙流川流域としたのは、道内で特にアイヌ系住民の割合が高い地域であり⁹⁾、この地域を対象とした先行研究が多いため、資料を得やすいと考えたからである。

Ⅲ アイヌによる地形の民俗分類

ここでは、『萱野茂のアイヌ語辞典』から抽出した地形に関するアイヌ語の語彙を、第1表から第5表に示した。アイヌ語の語彙は辞典の記載通りにアルファベットで表記している。また、語彙素分析が可能なものは語彙素ごとに分解し、和訳を与えた。抽出したア

第2表 丘・傾斜地・崖・谷地に関する地形の民俗分類

番号	辞典のアイヌ語彙	語彙素分析	辞典のアイヌ語彙の和訳	備考
22	nupka	nup 野原・ka 上	丘	集落から見て高い土地
23	rikun-nupka*	rikun 上の・nupka 丘	上の丘	2つのnupkaのうち高い方
24	ranke-nupka*	ranke 下の・nupka 丘	下の丘	2つのnupkaのうち低い方
25	ninarka		周囲より一段と高くなっている平らな土地	集落で一段高くなっている土地
26	rikun-ninarka*	rikun 上の・ninarka 台地	上の方の高いところ	ninarka よりもう1段上の土地
27	rucis	ru 道・cis 中窪み (C)	峠	
28	tanat-sir*	tanat 盛上っている・sir 大地		なだらかに凸状になっているところ
29	sir-kotor	sir 山・kotor 斜面	山の斜面	
30	hur		坂	
31	hur-kotor	hur 坂・kotor 斜面	坂の斜面	
32	hur-sut/sutu (hu)	hur 坂・sut 麓	坂の麓	
33	ran-pes	ran 下たる・pes 崖	山の端・崖の端	特になだらかに下っているところ
34	pira		崖	草木がない
35	soske-pira	soske 剥げる・pira 崖	剥がれた崖	草木がない
36	nisey		崖	箱のような崖
37	hutne-nisey	hutne 狭い・nisey 崖	狭い函川	
38	kut		崖・断崖	
39	wen-kut-or-ne	wen 悪い・kut 崖・or 所・ne なる	絶壁・断崖・崖	例えば層雲峡のようなところ
40	o-wor-ko-as-nupuri	oそこ・wor水・koに対し・as立つ・nupuri山	水際の崖	
41	nitat		湿地・谷地	灌木密生。歩けない程のぬかるみ
42	yaci		谷地・泥	ぬかるんでいるが歩ける
43	pesa-kar-usi	pesakar シカが自ら体に泥を塗る・usi 所	シカが集まる谷地	塩分のある土をシカが舐めに来る
44	poru		ほらあな・洞窟・土の中に入っていく穴	
45	mem		湧き水	
46	wakka-asin-usi	wakka 水・asin 出る・usi 所	泉・湧き水	
47	sir-puy	sir 大地・puy 穴	泉・湧水・井戸	

出典：『萱野茂のアイヌ語辞典』および同増補版より作成 *は辞典の見出し語にない語彙 (C)は知里による語彙素分析を参照したもの

アイヌ語彙の和訳については、辞典に記載されている通りの表記を行った。なぜならば、本辞典の記述には著者が日常使用している日本語が用いられており、著者の主観が投影された記述となっていると考えたからである¹⁰⁾。

1. 山に関する地形の民俗分類

第1表は、山に関する語彙を示したものである。アイヌ語で「山」を表す基本的な単語はnupuri(1)であり、地形としての山を意味する。同じ山でもkim(2)は、狩猟・採集を行う里山的な、生業の場としての山を意味している。同様に、metot(3)が単に奥山を意味するのに対し、同じ奥山でもiwor(4)は具体的な狩猟区を意味している。

「山麓」を意味する語彙は多く抽出できたが(6・7・8・9・10)、著者への聞き取りの際、説明するのが難しいということで¹¹⁾、全てを明らかにすることはできなかった。この中でnupuri-ous(6)は勾配の急な山麓で、nupuri-kes(7)は山麓の中でも特に平野に近いなだらかな部分であるという。

「尾根」や「峰」を意味する単語には、和訳に解釈の難しい点が見られる(16・17・18・19・20・21)¹²⁾。著者によれば、situ(16)は尾根、situ-o-kes(17)は尾根の末端部、situ-mekkaske(18)は特に鋭く尖った尾根、sikuma(19)は遠くからでも見える大きな峰、santu(21)は尾根の引込んだ部分であるという。

第3表 河川に関する地形の民俗分類

番号	辞典のアイヌ語彙	語彙素分析	辞典のアイヌ語彙の和訳	備 考
48	pet		川	低地を流れる
49	nay		沢・小沢	山間地を流れる
50	pinay	pi 小石・nay 沢 (C)	谷川・沢	
51	etoko (ho)	e 頭・toko 突起	①先に・前に ②源・上流	
52	pet-etok	pet 川・etok 先	川の源・水源	
53	pet-etoko	pet 川・etoko 先に	川上	
54	nay-etok	nay 沢・etok 先	沢の源	
55	hutne-pinay	hutne 狭い・pinay 谷川	狭い谷川	
56	rawne-pinay	rawne 深い・pinay 谷川	深い谷川	
57	so		滝	
58	ciw-as	ciw 流れ・as 立つ	急流	
59	pet-cicay	pet 川・cicay 浅瀬	浅瀬	川べりの水深の浅いところ
60	utka	utka 脇腹 (C)	瀬	ザラザラ流れているところ
61	hattar		淵	淵全般
62	keperepe		淀み・淵	流れがないうらい淀んでいる淵
63	moy		淵・淀み・渦巻き	深く渦巻いている淵
64	horka-moy	horka 逆さ・moy 淵	渦	渦が川を逆流するくらい激しい淵
65	pet-e-u-kot-hi	pet 川・e そこで・u 互い・kot 別れる・hi 所 (C)	川が繋がった所	合流点
66	o-u-kot-nay	o 尻・u 互い・kot 別れる・nay 沢 (C)	沢尻がくっついた沢	合流点
67	pet-u-ekari	pet 川・u 互い・ekari 行き合う	ふたまた (川)	分岐点
68	ru-pes-pet	ru 道・pes たどる・pet 川	道をたどる川	川ではなく道をさす
69	ru-pes-nay	ru 道・pes たどる・nay 沢	道をたどる沢	沢ではなく道をさす
70	hutne-nay	hutne 狭い・nay 沢	狭い沢	
71	pon-pet	pon 小さい・pet 川	小川	
72	nupki-pet	nupki 濁り水・pet 川	濁り川	土の色で濁った川
73	asir-pet	asir 新しい・pet 川	新しい川	洪水によって流れが変わった川
74	puyra-ruy-pet	puyra 飛沫・ruy 強い・pet 川	しぶきの強い川	
75	peciwor	peci 川・iwor 猟場	魚を獲りに行く川・川の漁場	
76	putu		河口	
77	pet-put	pet 川・put 口	川下・河口・川尻	
78	petoput	pet 川・o 尻・put 口	河口・川尻	pet-put に同じ
79	nay-o-put	nay 沢・o 尻・put 口	沢尻・沢口	
80	san-o-put	san 浜にある・o 尻・put 口 (C)	河口	

出典：『萱野茂のアイヌ語辞典』および同増補版より作成 *は辞典の見出し語にない語彙 (C)は知里による語彙素分析を参照したもの

2. 丘・傾斜地・崖・谷地に関する地形の民俗分類

第2表は、丘・傾斜地・崖・谷地に関する語彙を示したものである。nupka (22)には「丘」という和訳が与えられているが、語彙素に分解すると「nup 野原・ka 上」となる。著者によれば、集落の近くにnup (92)があり、そこよりも高いところにある土地がnupkaである¹³⁾。同様にninarka (25)は、集落の中で周囲より一段高くなっている平地である。これらは丘陵や段丘面を思わせる語彙ではあるが、この辺

りの高い土地はnupkaやninarkaと呼んでいたという説明¹⁴⁾のニュアンスからは、これらの語彙が地形を表現しているというよりも、むしろ地名として用いられていた印象を受ける。

「崖」を表す基本的な語彙はpira (34)・nisey (36)・kut (38)の3種類であり、piraは植生のない土の崖である。著者によればniseyは断崖に囲まれた「箱のような崖」であり¹⁵⁾、河川が岩盤を侵食してきた深い崖を指す。kutは急な岩崖のことである。

第4表 河岸・低地に関する地形の民俗分類

番号	辞典のアイヌ語彙	語彙素分析	辞典のアイヌ語彙の和訳	備考
81	pet-sam	pet 川・sam 側	川辺	川の側
82	pet-teksam	pet 川・teksam 目の前	岸・川端	川に手が届くくらい近距離
83	pet-parur	pet 川・parur 縁	川岸	河岸の水際
84	nay-parur	nay 沢・parur 縁	沢縁	沢岸の水際
85	toska		岸・川岸	洪水で侵食されて崖上になった岸
86	pitar	pit 小石が・tar 連続している(C)	川原・砂利原	砂礫で覆われた川原
87	pet-ruor	pet 川・ruor 流域	川原	川の流れに沿った土地
88	ru		流域	川が通る道として
89	ru-orke	ru 道・orke 内部	流域	川が通る道として
90	pikuta		砂	河原にあるサラサラした砂地
91	pikuta-toy	pikuta 砂・toy 畑	川洲・川原の畑	柳原の間の土の軟らかいところ
92	kupita		中洲	水面に出ている砂地
93	kupita-toy	kupita 中洲・toy 畑	中洲畑	1～2年で使い捨てにする砂地畑
94	nutap		河川が蛇行した内側や外側の耕作可能な土地	平地である
95	nutap-kes	nutap 蛇行の内外の低地・kes 末端	原っぱの下の方・川原尻	
96	nup		野・野原・原野・原っぱ	野原
97	ki-nup	ki カヤ・nup 野原	平原・カヤ原・草むら	カヤ原
98	kenas		平地・平野・平らなやぶ原・岸	川原にある灌木林・雑草原
99	mun-tum	mum 雑草・tum 中	草原	
100	sar		葦原・よしはら・湿地	アシ原
101	to		沼・湖	
102	to-teksam	to 沼・teksam 目の前	沼の縁	
103	ho-ahunke-i	ho 尻・ahunke 自ら入っている・i 所	湾曲した地形	

出典：『萱野茂のアイヌ語辞典』および同増補版より作成 *は辞典の見出し語にない語彙 (C)は知里による語彙素分析を参照したもの

「水際の崖」という意味の o-wor-ko-as-nupuri (40) は、崖を表現する語彙であるにも関わらず、語彙素に分解すると「そこ・水・に対し・立つ・山」となり、語彙素には山を意味する nupuri が用いられている。「谷地」に関しては、歩くことができる程度のものを yaci (42) とし、歩くこともままならないものを nitat (41) として区別している。yaci (42) は「谷地」を、nitat (41) は「仁田」を連想させるが、内地でも見られる「仁田」はアイヌ語起源の地名である。

3. 河川に関する地形の民俗分類

第3表は、河川に関する語彙を示したものである。「河川」を表す基本的な語彙は pet (48) と nay (49) であるが、北海道道南地域では、一般的に pet が低地を流れる川で、nay が山間を流れる沢を指している。pet-etok (52)・nay-etok (54) などは、川の源流部

を指す語彙であるが、etok は「先」という意味で、「川の行き先」を示している。

淵は hattar (61) と呼ばれるが、淵でも特に淀んでいて舟も止まるようなところは keperepe (62) と呼ばれ区別される。渦が巻いている深い淵は moy (63) と呼ばれ、渦が川を逆流するくらい激しい淵は horka-moy (64) と呼ばれている。

「川の合流点」を意味する語彙 pet-e-u-kot-hi (65) は「pet 川・e そこで・u 互い・kot 別れる・hi 所」¹⁶⁾、o-u-kot-nay (66) は「o 尻・u 互い・kot 別れる・nay 沢」という語彙素に分解できる。pet-u-ekari (67) は「川の分岐点」を表す語彙であるが、「pet 川・u 互い・ekari 行き合う」という語彙素に分解できる。ru-pes-pet (68) や ru-pes-nay (69) は、「道をたどる川・沢」という和訳が与えられているが、著者によれば、これは「川に沿って道がある」という意味であ

第5表 海に関する地形の民俗分類

番号	辞典のアイヌ語彙	語彙素分析	辞典のアイヌ語彙の和訳	備考
104	atuy		海	
105	atuy-ka (si)	atuy 海・ka 上	海上	観察者から近い範囲
106	atuy-kurka (si)	atuy 海・kurka 上	海の表	水平線まで
107	atuy-cicay*	atuy 海・cicay 浅瀬		海の浅瀬
108	atuy-sam	atuy 海・sam 側	海辺・海岸	海の側
109	pis		浜	
110	masar		浜・砂浜から離れた草の生えた所	
111	koy-nuwe-usi	koy 波・nuwe 掃く・usi 所	海岸・波打ち際	
112	watara		平磯	
113	sirara		磯・平磯	
114	so		①座・床・敷物 ②面 ③平岩	海岸に見え隠れしている岩
115	moytek		入り江	波の静かな入江
116	tomari		港・湾・入江・とまり	舟を泊めることのできる入江
117	sir-etu	sir 陸地・etu 鼻	岬	
118	nottu		岬	
119	pon-mosir	pon 小さい・mosir 大地	島	
120	repun-iwor	repun 沖の・iwor 猟場	漁場・行きつけの海とその漁場	

出典：『萱野茂のアイヌ語辞典』および同増補版より作成 *は辞典の見出し語にない語彙

り、川そのものを表す言葉ではない¹⁷⁾。

「河口」を意味する語彙は多く抽出できたが(76・77・78・79・80)、聞き取りからこれらの違いは明らかにならなかった。

4. 河岸・低地に関する地形の民俗分類

第4表は、河岸や低地に関する語彙を示したものである。ここでは「河原」を意味する語彙が多く抽出された(81・82・83・84・85・86・87)。pet-sam(81)・pet-teksam(82)はともに「川の側」という意味であるが、teksamは「手の側」すなわち「目の前」という意味であり、川に手が届くくらい近い場所を指している。pet-parur(83)は「pet川・parur縁」に分解でき、河原の水際の部分を表している。toska(85)は河原の中で洪水によって侵食され崖上になっている部分を指す。pitar(86)は砂礫に覆われた河原を意味する。pet-ruor(87)には「川原」という和訳が与えられているが、この語彙の解釈も難しい。著者によれば、これは川の流れに沿った土地のことで、そのような意味で「川原」という和訳を与えたと言う¹⁸⁾。

ruorはru-orke(89)と同義であるが、辞典ではru(88)やru-orke(89)に「流域」という和訳が与えられている。著者によれば、これらは通常「流域」という意味では用いず¹⁹⁾、ruは「道」、orkeは「内部」という意味であり、petやnayと結びつくことで初めて「流域」という意味をなす。

低地に関する語彙については、nupap(94)は河川が蛇行している部分の内側や外側の耕作可能な平地のことである。kenas(98)は、辞典の解説では「川端の山がひっこんで低くなり林になっている所」とあり、河原にある草地や灌木林を指す語彙である。

5. 海に関する地形の民俗分類

第5表は、海に関する語彙を示したものである。本辞典では、著者が山には詳しい反面、海には精通していないこともあり、海に関する語彙数は少ない²⁰⁾。この中では、同じ「海上」を意味する語彙でも、atuy-ka(105)が海上で観察者から見える狭い範囲内を指すのに対し、atuy-kurka(106)は水平線までの広範囲を指す。atuy-sam(108)は「海辺・海岸」という

和訳が与えられているものの、単に「海の側」という漠然とした意味の語彙である。一方で pis (109) は「浜」、masar (110) は同じ浜でも海から少し離れた植生のあるところを指し、実質的に地表の形態を表現している語彙である。

IV 考 察

ここでは、アイヌの伝統的環境認知の体系を明らかにするために、地形に関する民俗分類をアイヌの環境観と関連付けて考察する。

1. 河川に関する伝統的環境認知の体系

河川に関しては、例えば ru-pes-pet (68) に「道をたどる川」という和訳が与えられているにも関わらず、実際には川そのものを指すのではなく、川に沿って道がある様子を表現している語彙である。当然のことながら、前近代の北海道には舗装道路などあるはずもなく、移動は舟による河川交通を除けば、ほぼ徒歩で川沿いを歩くのに限られていたため、次第に川沿いに道が開けていったのである。この語彙からは、前近代のアイヌの移動に川が重要な役割を果たしていたことが読み取られる。

知里 (1956) も述べているように、前近代のアイヌは、河口を陰部や尻 (76・77・78・79・80)、瀬を脇腹 (60)、源流を頭 (55・56・57・58) など、川を人体になぞらえて認知していた。そして川は陰部から入って頭へ向かって流れると考えられていたのである。例えば、川の合流点 pet-e-u-kot-hi (65) を「川が分かれる」と表現している点や、川の分岐点 pet-u-ekari (67) を「川が行き合う」と表現している点、川の源流部 pet-etok (52) を「川が行き先」と表現している点も、川が下流から上流に向かって流れると考えればつじつまが合う。これは、まだ道のない時代、アイヌが山へ狩猟に行く際に川を遡って行く必要があったことや、サケなどの重要な食糧となる魚が川を遡上す

る姿から読み取られた環境観であると考えられる。

また、川は生き物であるから移動も行う。ru (88) や ru-orke (89) が「道」・「道の内部」という語彙素に分解できるのにも関わらず、「流域」という和訳が与えられ、それが具体的には川の流れた土地を指している点に注目したい。このことから、前近代のアイヌは、川沿いの低地を川が移動するための道であると認知していたと考えられる。

以上のことから、前近代のアイヌは、河川を擬人化して認知していたことがわかる。河川の擬人化はアイヌのみならず、例えば、日本においても利根川を「坂東太郎」と呼ぶ例が見られるが、アイヌの河川認知の体系は、河川を頭・尻といった人体の部位になぞらえて認知している点に特徴があると言える。

2. 海・低地に関する伝統的環境認知の体系の希薄性

当該地域の生活様式から判断すると、山のアイヌが海まで出て漁を行うことは稀であったため、内陸と沿岸のアイヌの伝統的生活様式には若干の違いが見られる。すなわち、山のアイヌはシカなどを主たる狩猟対象としていたのに対し、海のアイヌの狩猟対象は海獣であるのが一般的であった。また、沿岸地域のアイヌは、江戸時代の場所請負制により和人と接触が早く、明治期の早い段階ですでに文化の変容が起こっていた。一方、内陸のアイヌは和人と接触が比較的遅く、二風谷では昭和初期までアイヌ文化が伝承されていた。これらのことから考えても、伝統的生活様式における山のアイヌが海に精通し、多くの語彙を有していたとは考え難い。

また、低地に関する語彙数は山地や河川に比べ少ない。これについては、前近代のアイヌはごく簡単な農耕は行っていたものの、生業の中心は狩猟・漁労・採集であり、近代に入るまで稲作は行われなかったことに起因していると考えられる。

3. 伝統的地形認知の特性

本稿では、nupuri (1) と kim (2), metot (3) と iwor (4) などに代表されるように、同一地形に対して、コンテキストの違いにより異なる名称が用いられている例が明らかになった。例えば、nupuri は遠くに見える、いわば地物としての山であるのに対し、kim は狩猟や採集を行う生活圏内の山であり、地形的には同一でも、両者が異なるものとして認知されていたことがわかる。

峰や尾根を示す語彙 (16・17・18・19・20・21) は多く抽出されたが、これらはアイヌが山奥での狩猟の際に自分の居場所を特定させるための重要な目印であったと考えられる。ところで、辞典のアイヌ語語彙の和訳には、本来「尾根」を意味する語彙に対して「峰」という和訳が与えられている傾向がある (16・17・18・20・21)。例えば situ-mekkaske (18) は「尾根・峰」という語彙素に分解できるが、この mekkaske という語彙は emus-mekkaske と言えば「刀の峰」、situ-mekkaske と言えば「山の峰」すなわち「尾根」の意味となり、アイヌの環境観の特徴が現れた表現であると言える。そのことから考えると、著者の言う「峰」は、必ずしも「山の頂」という地形学的な意味での「峰」とはならず、あたかも刀の峰をイメージしたものとなろう。そうであれば「尾根」を意味する situ (16) に「峰」という和訳を与えるといった、一見解釈の難しい記載も説明がつく²¹⁾。

大貫 (1980) は、樺太アイヌの世界観において、「山」と「丘」の概念が海拔高度ではなく隔海度によって決められていることを明らかにしている。すなわち、相対的に海に近いものを「丘」とし、遠いものを「山」とする区別である。沙流川流域においては、この事例とは若干の違いが見られた。著者に山と丘の違いを質問したところ、遠くに見えるものが山で、手前に見えるものが丘であるという説明があった。辞典では pon-nupuri (12) や nupka (22) に、「丘」という和訳を与えているが、著者は聞き取りの際、pon-

nupuri は低くともあくまで山であることを強調しており、海拔高度という概念は捨象されている。一方で、アイヌは川沿いの相対的に低い土地に集落をつくっていたため、集落から見て標高の高い土地を nupka や ninarka (25) と呼び、集落から近いところでは海拔高度が考慮されていた。このことから、沙流川流域のアイヌは、集落から遠くにあるものを山とし、集落の近くにあるものを丘として認知していたと考えられる。

また、atuy-sam (108) が「海の側」という漠然とした意味であり、「浜」を意味する pis (109) のように、具体的な地形ではなく、場所を意味している点に注目したい。このような事例は、atuy-ka (105)・atuy-kurka (106)・pet-sam (81)・pet-teksam (82)・to-teksam (102) などにも見ることができる。

前近代のアイヌによる地形の分類は、近代地形学が行うような地形の成因によるものではなく、主体からの距離や見た目の違いによって分類がなされていたことが読み取れる。これらの民俗分類から、前近代のアイヌが伝統的な生活様式や環境観の中で、近代科学とは異なる独自の認識の体系、すなわち民族科学をもって、伝統的生活様式を築いていたことがわかる。

V おわりに

本稿では、『萱野茂のアイヌ語辞典』から地形に関する語彙を抽出し、民俗分類を試みた。その結果明らかになったことを要約すると以下の通りである。

① atuy-sam (108) などにみられるように、辞典の見出し語の中で、一見地形を表現しているかにみえる語彙が、必ずしも地形を表現しているとは言えない点、集落からの距離によって「山」と「丘」との区別がつけられている点、地形的には同じ尾根でも、尖った尾根を表すには別の語彙が用いられている点などから考えて、アイヌによる地形の民俗分類では、主体からの距離や見た目の違いなどを重視し、近代地形学が扱う地形の成因などは捨象される。これらは、前近代に

おけるアイヌ独自の宗教的世界観の中で培われてきた分類体系の特徴であると言える。

②民俗分類に語彙素分析を取り入れたことによって、例えば pet-etok (52) が「川・先」に分解できるように、語彙からアイヌの環境観を読み取ることができた。川を人体になぞらえて認知している点などは前近代のアイヌの環境観で特筆すべき点であり、語彙素分析からもそのことが読み取れる (51・60・65・66・67・68・69・76・77・78・79・80・81・82)。

③ここでは萱野の辞典のみから地形語彙を抽出したが、例えば「河口」に関する語彙 (76・77・78・79・80) のように、明らかにならない点も見られた。今後、他の辞典や資料を併用することで、さらに多くの語彙が抽出され、ここで明らかにできなかった点についても、より詳細な分析が可能になると考えられる。

本稿でアイヌの伝統的環境認知の体系を明らかにするために地形の民俗分類を取り上げたのは、山に分け入って獲物を追い、植物を採り、川では魚を捕らえるという伝統的生活様式におけるアイヌにとって、地形は大変身近であり、かつ重要な環境の構成要素であったと考えられるからである。また、地形に関する研究

蓄積が少ないことに加え、地形が地理学の主たる研究対象の一つであることから、アイヌ研究における地理学のアプローチの可能性と必要性を感じたからである。

従って本稿は、狩猟・漁労・採集を生業とした伝統的生活様式におけるアイヌの知覚環境を、地形の民俗分類を明らかにすることで現代に復元できることを示唆した点、アイヌ文化の現状を考えると、伝統的生活様式における環境観の復元はもはや困難であると思われるがちな中で、新たな方法論を用いて切り口を見出した点で、本邦におけるアイヌ研究に十分に貢献しうると考えられる。

謝辞

本稿の作成にあたり、アイヌ語辞典の著者である萱野 茂先生からは、語彙に関する大変貴重なご教示を賜った。また、立正大学地球環境科学部地理学科の斎藤 毅先生からは、多くのご指導・ご助言を頂いた。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

(受付2003年3月17日)

(受理2003年6月18日)

注

- 1) 分類はものを認識する際に必要不可欠な作業である。ある集団における土着の分類体系は Folk-Taxonomy (民俗分類) と呼ばれる。Taxonomy とは分類学の意で、民俗分類とは、あるカテゴリーのものが、当該地域の住民によってどのように認識され、分類されているのかといった、住民の知識の形式的側面を明らかにするための手法である (松井, 1989)。なお、民俗分類には、語彙素分析に重点を置いた Folk-Taxonomy と、語彙を社会体系と関連付けて捉えようとする Folk-Classification がある (山田, 1986)。ちなみに、堀 (1979) は「民族分類」という表現を用いているが、その意味するところは民俗分類と同じであると考えてよい。
- 2) Ethno-Science の和訳。あるカテゴリーのものに関して、日常生活での利用法や環境への適応などについての、当該地域の住民による近代科学普及以前の実用的知識の体系を

意味する。つまり、Ethno-Science とは、ある民族における西洋近代科学普及以前の認識の体系である。Ethno-Science を追究する学問を新民族誌学といい、住民の知識の実質的側面を明らかにするものである (松井, 1989)。

- 3) 人間は言語によって思考し、ものを認識する。その認識の過程で、ものは様々なカテゴリーに分類されていく。認識人類学は、言語と文化が深い関係を持つことに着目し、民族の認識の体系を探る一つの方法論として言語学的手法を用いたものであり、民俗分類もその手法の一つである (松井, 1989)。
- 4) 知里の研究は、地名に見られる地形に関する語彙を集め、それらの意味を環境観と関連付けて解説したものである。地形を細かく分類・体系化したものではないが、地形に関しては萱野の辞典よりも詳細な記述がなされており、語彙数も多い。しかし、北海道および樺太の各地から語彙を収集しており、特定の対象地域を扱う場合の資料としては適切ではない。

- 5) 1871(明治4)年, 戸籍法の制定によりアイヌは「平民」に編入され, 農具が与えられ農耕を強制された。1876(明治9)年には狩猟に用いられる仕掛弓が禁じられ, 1889(明治22)年にはアイヌの食糧分として認められていたシカ猟も禁じられた。そのような過程で, 日本語の使用が強制され, 独自の風習も禁じられ, 狩猟を基盤とする伝統的生活様式は崩壊していった。
- 6) 近年では, 萱野の辞典の他にも, 『アイヌ語千歳方言辞典』(中川 裕, 1995), 『アイヌ語沙流方言辞典』(田村すず子, 1996) が出版されている。中川の辞典は見出し語数約3,700で, 口承文芸の解説に必要な基本語を収録したものである。田村の辞典は見出し語数約9,400と豊富で, インフォーマントによる音声資料や聞き書きを基に語彙を収録したものである。
- 7) 本辞典は言語学者によって記述されたものではなく, アイヌがつくったアイヌ語辞典(萱野, 1996)である。見出し語数は約8,000で, 一部参考文献を用いたものも見られるが, ほとんどの語彙は著者が母語として聞き覚え, 使用していたものである。見出し語を600語追加した増補版が2002年に出版されている。
- 8) 沙流川流域のニ風谷においては, 昭和10年頃まではアイヌ語が日常語として話されていた(萱野, 1996)。しかし, 前述の通り, アイヌの伝統的生活様式は明治中期には崩壊しており, 辞典にあるアイヌ語の語彙が, 伝統的な環境観を復元するのに適切なものか, という問題が発生する。これに対しては, 著者の祖父母の世代は明治以前の生まれであり, 共同主観に基づいて伝統的生活様式が維持されていた時代を知る世代であることから, 彼等からアイヌ語を学んだ著者は, 共同主観に基づいた前近代のアイヌ語を継承していると思われる。従って本辞典の語彙は, アイヌの伝統的な環境観を復元するのに適切であると考えられる。
- 9) 北海道ウタリ生活実態調査(2000)によれば, 沙流川流域も含めた日高支庁管内には, 全道のアイヌ系住民の37.7%が居住しており, 道内で最も割合の高い地域となっている。
- 10) 本辞典は, 北海道方言も含め, 著者が日常使用している日本語で記述されている。そのため, 著者の主観が反映された記述となり, 主観に基づいて環境観を復元するには適しているが, 一方で, 著者にしかわからないような記述がなされることもあり, 解釈の難しい点の一部が見られる。
- 11) 2003年3月7日, 著者宅における聞き取りの結果による。
- 12) 例えば, situ の和訳は「尾根・峰・つね(峰)」とあり, 非常に解釈が難しい。そこで筆者は, 著者が「尾根」と「峰」の意味を誤って認識している可能性が高いと感じ,

質問したところ, 「尾根」と「峰」の違いはよくわからない, と言う。また, 著者は, 「つね」については, 谷と谷の間が一番高いところである, と言う。つまり, 「つね」は「尾根」と同じ意味であると考えてよい。

- 13) 2003年3月7日, 著者宅における聞き取りの結果による。
- 14) 2003年3月7日, 著者宅における聞き取りの結果による。
- 15) 2002年12月4日, 著者宅における聞き取りの結果による。
- 16) この語は, 萱野の辞典では「pet-e-u-kot-hi」と記載されており, 和訳に「川一繋がる一所」という解説が加えられているが, これは意識である。知里によれば, 語源は「pet-e-u-ko-hopi-i」で, 「川がそこで互いに捨て去る所」という意味である。
- 17) 2003年3月7日, 著者宅における聞き取りの結果による。
- 18) 2003年3月7日, 著者宅における聞き取りの結果による。
- 19) 2003年3月7日, 著者宅における聞き取りの結果による。
- 20) 筆者は, 辞典の見出し語全てに目を通し, 地形に関する語彙を抽出したが, 見出し語自体に海に関する語彙数が少ない印象を受ける。また, 辞典のはしがきにも, 山育ちの著者が海の魚の名前をあまり知らないため, 海産動物の名前については参考文献を用いていることが記されている。
- 21) 「峰」については, かつてアイヌの家で家宝とされてきた emus (刀) がそのイメージ形成に寄与していると思われる。emus は武器としてではなく, 儀礼用に用いられていた。

参考文献

- 浅野久枝(1984): 東京都三宅島における地形を主とした民俗分類体系。地理学評論, 57A, 519-536。
- 犬飼哲夫(1968): アイヌと山。民族学研究, 32, 328-338。
- 煎本 孝(1988): アイヌは如何にして熊を狩猟したかー狩猟の象徴的意味と行動戦略一。民族学研究, 53, 125-154。
- 遠藤匡俊(1990): 紋別アイヌの家族成員の流動性。地理学評論, 63A, 221-236。
- 遠藤匡俊(1997): 『アイヌの狩猟採集社会一集団の流動性に関する地理学的研究一』。大明堂, 203p。
- 大貫恵美子(1980): 文化と分類一アイヌの空間観念を例として一。思想, No.676, 26-45。
- 萱野茂(1996, 2002): 『萱野茂のアイヌ語辞典』。三省堂, 597p。『萱野茂のアイヌ語辞典増補版』。三省堂, 631p。
- 金田一京助採集並二訳(1936): 『ユーカラ: アイヌ叙事詩』。岩波書店, 350p。
- 久保寺逸彦(1956): 北海道アイヌの葬制一沙流アイヌを中心として一。民族学研究, 20, 1-35。

- 久保寺逸彦（2001）：『久保寺逸彦著作集①アイヌ民族の宗教と儀礼』。草風館，373p.
- 小木亜紀子・菊池 真・古谷尊彦（1999）：北海道アイヌ語地名に見られる人々と自然環境との関わり。季刊地理学，51-2，103-113.
- 小林和夫（1975）：安政3年の蝦夷地におけるコタンの分布。北方文化研究，No.9，93-127.
- 小林和夫（1980）：チャシ分布に関するチャシ地名からの接近。北海道地理，No.54，24-45.
- 斎藤 毅（1989）：沿岸地域の伝統的生活様式における知覚環境の二元性。九学会連合日本の沿岸文化調査委員会編：『日本の沿岸文化』。古今書院，22-34.
- 知里真志保（1951）：『アイヌ語地形語彙』。北海道郷土研究会，43p.
- 知里真志保（1956）：『地名アイヌ語小辞典』。北海道出版企画センター，169p.
- 堀 信行（1979）：奄美諸島における現生サンゴ礁の微地形構成と民族分類。人類科学，No.32，187-224.
- 堀 信行（1982）：奄美大島における礁地形の方名およびその空間構成と地理的分布。九学会連合奄美調査委員会編：『奄美—自然・文化・社会』。弘文堂，13-21.
- 松井 健（1989）：『琉球のニュー・エスノグラフィー』。人文書院，281p.
- 山田孝子（1986）：アイヌの植物分類体系。民族学研究，51，141-167.
- 山田孝子（1994）：『アイヌの世界観—「ことば」から読む自然と宇宙—』。講談社，278p.
- 吉田 巖（1956）：杖のみたま—十勝アイヌの故老談話記録—。民族学研究，19，135-154.
- 渡辺 仁（1952）：沙流アイヌにおける天然資源の利用。民族学研究，16，71-82.

A tentative study on the Ainu Folk-Taxonomy of landforms in the Saru river basin, Hokkaido.

ISE Hiroshi*

[keywords] 1 Ainu 2 Folk-Taxonomy 3 Environment-View 4 Landform 5 Humanistic Geography

*Graduate student of the Geographical space systems, School of Geo-environmental science, Rishso University.